

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284001

研究課題名(和文) 道德認知と社会的認知の統合的哲学研究

研究課題名(英文) Integrated philosophical investigation into moral cognition and social cognition

研究代表者

信原 幸弘 (NOBUHARA, Yukihiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10180770

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円

研究成果の概要(和文)：道德判断と道德的動機づけがどのようにして道德認知と社会的認知の相互作用から生み出されるかを明らかにするとともに、その哲学的意義を導き出した。道德的善悪の理性的認知と感情的認知はともに他者の意図の理解や他者の視点との相互作用を経て、道德判断と道德的動機づけを生む。ここから哲学的意義として、道德判断は状況の道德的価値の認識であること(認知主義)、道德判断それ自体に動機が含まれること(内在主義)、道德的行動は状況のあり方に強く影響されつつも、行為者の性格(徳)のあり方にも左右されることを導き出した。

研究成果の概要(英文)：We investigated the way moral judgment and moral motivation are produced through the interactions of moral cognition with social cognition and derived its philosophical implications. Cognition of moral goodness and evil, whether by reason or by emotion, produces moral judgment and motivation through the interactions with the understanding of others' intentions or the taking of others' perspective. The philosophical implications we derived are that moral judgment is recognition of moral value of the situation (cognitivism), that moral judgment in itself includes motivation (internalism), and that moral behavior depends on the agent's character (virtue) while it is heavily influenced by the situation.

研究分野：人文学

キーワード：道德理性 道德感情 共感 自由意志判断 道德/慣習の区別 状況主義 徳倫理 社会規範

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、いわゆる「道徳心理学(モラルサイコロジー)」の研究が凄まじい勢いで発展している。それは人間の心が「善悪」や「正不正」といった道徳性をどのように認知して行動するのかを体系的に研究する学問分野であるが、そこには哲学、倫理学、認知心理学、社会心理学、進化心理学、認知神経科学など、多様な分野からの知見が集まり始めている。道徳認知は大きく道徳理性と道徳感情からなるが、それらの認知が他のさまざまな心理過程とどのように相互作用するのかについて、豊富な経験的データが蓄積されてきている。しかしながら、そのような経験的データにかんする体系的な理論的説明および哲学的意義づけはほとんど試みられていない。

(2) 道徳認知と相互作用する中心的な心理過程は「社会的認知」(他者や集団との関わりで生じる認知)だと考えられる。人間の生活において道徳認知が向かう対象は、ほとんどつねに他者の行為や人格性であり、我々は「善い行為/悪い行為」や「善い人/悪い人」といった評価を特定の間人関係や利害関係を含んだ「所属集団」のなかで行う。そこで、道徳認知と社会的認知の相互作用を体系的に説明し、哲学的に意義づけることがとくに重要となる。

2. 研究の目的

(1) 道徳的判断を導く認知的相互作用を研究する。道徳的判断がさまざまな刺激要因によって変わりうるという現象を、道徳認知(理性と感情)と社会的認知(意図理解・視点取得)の相互作用として統一的に説明するモデルを構築する。また、この成果の哲学的意義を探究する。すなわち、社会的認知が道徳認知の構成要素であるのかどうかを吟味し、道徳的判断に関連する要素を明確化するとともに、道徳的判断がいかなる内容をもつものなのかを明らかにする。

(2) 道徳的行動を導く認知的相互作用を研究する。道徳的に善い/悪い行動の実行は、集団的要因や状況的要因に大きく依存しており、きわめて可変的であることが知られているが、とくに「攻撃・援助」と「協力・罰」に焦点を合わせて、それらの道徳的行動の背後にある社会的認知をモデル化し、統一的な説明を試みる。また、この成果の哲学的意義を探究する。すなわち、道徳的動機づけに関する内在主義と外在主義の論争に決着をつけることを試みる。また、道徳的行動が状況に大きく依存するにもかかわらず、徳倫理学の言う道徳的人格がなお有効かどうかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 道徳的判断と道徳的行動をめぐる多様な現象を説明するために道徳認知と社会的認知の相互作用をモデル化する。主として社会心理学的実験、脳科学的実験、実験哲学的

調査を行ってデータを取得し、それに哲学的考察を加えてモデル化を試みる。

(2) 道徳的認知と社会的認知のモデル化からその道徳哲学的な意義を明らかにする。とくに道徳的判断の内容、道徳的判断と動機の関係、道徳的人格をめぐる論争について哲学的な探究を行う。

4. 研究成果

(1) 道徳認知と社会的認知の相互作用を研究し、哲学的考察を加えた。

道徳的判断に関して道徳感情と社会的認知がどう相互作用するかをモデル化するために、それに関連する研究をいくつか行った。まず、サイコパスが道徳と社会的慣習の区別を正確に理解できないという事実を考察して、道徳と社会的慣習の区別が他者危害の有無にあり、サイコパスは他者危害による他者の痛みを共感的に認識できないために、その区別を理解できないのだということを明らかにした。第二に、他者の痛みに対する共感反応の生起プロセスを脳科学的レベルで理解することに取り組んだ。第三に、自由意志判断および道徳的責任判断が他行為可能性の有無によってどう左右されるかを実験哲学的に調査して、それらの判断のメカニズムを考察した。第四に、有責性判断・他者への制裁意図・不平等は正判断に関する質問調査を実行し、その分析を行った。第五に、道徳的直観・自由意志信念・推論バイアスを軸にして道徳的判断メカニズムの分析を行った。

道徳的行動に関して道徳理性と社会的認知がどう相互作用するかをモデル化するために、道徳理性がどのように社会的認知の影響を受けるかを探った。それとともに、道徳感情が道徳理性と相互作用を有しつつも、基本的にはそれから独立であるために、道徳理性が社会的認知の影響を受けても、道徳感情はその影響を受けず、それゆえ道徳感情と道徳理性の間に葛藤が生じることがありうることを理論的に解明した。

道徳的判断と道徳的行動に関する以上の研究により、道徳理性、道徳感情、社会的認知は、互いに相互作用しつつも、それぞれ基本的には独立の過程であり、どれかが基礎となって他のものがそれに従属するという一方向的な関係ではないこと、それゆえこの三者は互いに協調・調和することがある反面、ときには互いに対立・葛藤することもあることをある程度、明らかにすることができた。

(2) 道徳的判断における道徳理性と社会認知の相互作用、および道徳的行動における道徳感情と社会認知の相互作用にとくに焦点を当てて研究し、哲学的考察を加えた。

道徳的判断や行為は三人称的な視点から理性的になされることもあるが、その基礎には二人称的な視点から面と向かって情動的に行われる道徳的判断や行為があり、これらこそが道徳的実践の核心であることを明らかにした。

ゲーム理論と強化学習の考え方にに基づき、

社会規範が集団内に定着する過程について理論的・実証的な検討を行った。理論面では二者の間で視点が共有される仕組みについて、「マッチングペニーゲーム」と呼ばれる二人ゲームを使ってモデルを構築した。実証面では、このモデルに基づく行動実験およびfMRI実験を行った。

道徳的主体性が知覚されると、道徳的主体として道徳的責任を担う者とみなされるのにたいし、道徳的経験性が知覚されると、道徳的客体として道徳的配慮の対象とみなされる傾向があることを社会心理学的な実験により確かめた。

道徳的判断と意図性判断の相互作用に関わる神経基盤、とくにその影響の方向性を明らかにするために、実験哲学において議論されてきた副作用効果をもたらすシナリオを組み込んだ脳機能イメージング実験を実施し、データを取得した。

道徳認知と社会認知を峻別しない倫理学理論の一つである徳倫理学について包括的な考察を行い、そのような見方が現在においても十分それなりの説得力をもつことを明らかにした。

自由、責任、義務、直観といった心理的要因が、自由意志論や道徳認識論の中心的概念と重なるものであり、これらが経験的知見から哲学的含意をとりだすうえでの接点となることを明確化した。

(3) 社会的認知が道徳的判断にどう影響するかをいくつかの観点から考察・解明し、哲学的考察を加えた。

道徳的ディレンマのなかでも悲劇的ディレンマにおいては、よりましな行為を選択した行為者に対して同情を禁じえないとしてもなお、その行為が道徳的に正しいとは言えないことを明らかにした。

どんな対人関係とその認知のもとでネガティブな道徳関連感情(シャードンフロイデや嫉妬)が発生するかに焦点を当てて、そのような感情の規定要因を解明するために実証的研究を行った。

高齢者に対する偏見や、犯罪被害者が被害者参加制度に対して抱く評価など、応用的問題にも踏み込み、道徳的評価を含む判断バイアスの規定要因を研究した。

自由意志に基づいて意図的に行為がなされたかどうかに関する判断の基盤となる我々の自由意志概念は、両立論的側面と非両立論的側面の両方をはらんでいて、首尾一貫したものではないことを実験哲学研究の結果および概念分析によって見出し、よりよい道徳的実践のために我々の自由意志概念を部分的に修正する必要があることを明らかにした。

道徳的判断の基盤となる他者の心的状態の推測には、メンタライジングネットワークと呼ばれる脳のネットワークが関与することが知られているが、このネットワークの働きを探るために、fMRI用の「心の理論ローカ

ライザー」を開発した。

(4) 道徳的行動(それをもたらす道徳的判断や意思決定も含む)がどのような要因によって決定されるかを研究し、哲学的考察を加えた。

道徳的行動の決定因については、従来、性格を重視する徳倫理的な立場と、状況を重視する状況主義的な立場との間で論争がなされてきたが、研究の結果、いずれの要因も関与するとの結論に至った。道徳的行動は内的要因(個人の性格や価値観など)と外的要因(個人を取り巻く環境のあり方)の両方に影響される。また、内的要因は不変ではなく、それまで個人がどのような状況のもとでどんな経験をしてきたかによって変化しうる。

リスクをどれくらい重視して道徳的な意思決定を行うかは、個人が自分の場合にその決定を行うときと他者の場合にその他者の決定を代行するときとは違いが見られるが、その違いは個人の「社会的価値志向性」の程度によって異なることを見出した。

犯罪場面や社会的ディレンマ状況での道徳的判断は、理性的、論理的判断を重視するフレームを採用したときに、心理的距離および自由意志信念によって影響され、情動が支配的なフレームでは必ずしもそうではないことが分かった。

脳機能イメージング法を用いた実験により、社会規範に対する説得を受けて規範への賛成の度合いが高まるときには、社会性に関わる脳の諸領域の活動が上昇し、そうでないときには側頭葉の一部の活動が上昇することが分かった。

哲学的考察により、情動は世界の価値的なあり方を身体的に感受するものであり、それゆえそのような価値的なあり方を正しく捉える道徳的情動は正しい道徳的判断や適切な行動を導くことができることを明らかにした。

実験哲学的な手法により、道徳的直観の批判的検討を行い、倫理学の理論構築における道徳的直観の役割について見直しを行うとともに、道徳的直観が道徳的判断・行動に及ぼす影響を再考した。

道徳的判断に動機が内在するとする「動機内在主義」とそうでないとする「動機外在主義」のメタ倫理的論争に関して、道徳的判断の本性の吟味により、動機内在主義のほうが妥当であることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計27件)

鈴木 貴之、哲学における責任の問題、法律時報、査読無、90巻、2018、33-38

上島 淳史、亀田 達也、資金獲得に伴う不確実性は他者のためのリスク選択に影響するか、心理学研究、査読の有、88巻4号、

2017、383-389、

DOI: 10.4992/jjpsy.88.16328

白岩 祐子、唐沢 かわり、刑罰抑制効果の検討：「理性」重視の価値観に着目して、人間環境学研究、査読有、15 巻、2017、25-30、DOI: 10.4189/shes.15.25

Yukihito Yomogida, Madoka Matsumoto, Ryuta Aoki, Ayaka Sugiura, Adam N. Phillips, and Kenji Matsumoto, The neural basis of changing social norms through persuasion, *Scientific Reports*、査読有、7:16295、2017、頁数なし(オンラインジャーナルのため)、

DOI: 10.1038/s41598-017-16572-2

二木 望、渡辺 匠、櫻井 良祐、唐沢 かわり、実体性が両面価値的な集団への行動意図に及ぼす影響：エイジズムに着目して、*社会心理学研究*、査読有、32 巻、2016、81-91、<http://doi.org/10.14966/jssp.0879>

白岩 祐子、小林 麻衣子、唐沢 かわり、「知ること」に対する遺族の要望と充足：被害者参加制度は機能しているか、*社会心理学研究*、査読有、32 巻、2016、41-51、

<http://dx.doi.org/10.14966/jssp.0920>

Keise Izuma, Kazuhisa Shibata, Kenji Matsumoto, and Ralph Adolphs, Neural predictors of evaluative attitudes towards celebrities, *Social Cognitive and Affective Neuroscience*、査読有、12 巻 3 号、2016、382-390、

DOI: 10.1093/scan/nsw135

Jun, K. & Karasawa, K. How we view people who feel joy in our misfortune: The influence of expressed schadenfreude in interpersonal situation, *Korean Journal of Social and Personality Psychology*、査読有、30 巻、2016、1-21

渡辺 匠、松本 龍児、太田 紘史、唐沢 かわり、一般的・個人的自由意志尺度(Free Will and Determinism Scale: FWDS)日本語版の作成、*パーソナリティ研究*、査読有、24 巻 3 号、2016、228-231、

DOI: 10.2132/personality.24.228

Sotaro Shimada, Madoka Matsumoto, Hidefumi Takahashi, Yukihito Yomogida, and Kenji Matsumoto、Coordinated activation of premotor and ventromedial prefrontal cortices during vicarious reward, *Social Cognitive and Affective Neuroscience*、査読有、11 巻、2015、508-515
DOI: 10.1093/scan/nsv134

渡辺 匠、太田 紘史、唐沢 かわり、自由意志信念に関する実証研究のこれまでとこれから：哲学理論と実験哲学、*社会心理学からの知見*、*社会心理学研究*、査読有、31 巻 1 号、2015、56-69

DOI: 10.14966/jssp.31.1_56

信原 幸弘、判断に抗して情動に導かれる行為は合理的でありうるか、*哲学・科学史論叢*、査読無、17 号、2015、1-15

Kazuki Iijima and Koji Ota、How (not) to draw philosophical implications from the cognitive nature of concepts: the case of intentionality, *Frontiers in Psychology*、5 巻 799 号、2014、1-5

DOI: 10.3389/fpsyg.2014.00799

松元 健二、やる気と脳：価値と動機づけの脳機能イメージング、*高次脳機能研究*、34 巻 2 号、2014、165-174

白岩 裕子、唐沢 かわり、量刑判断に対する増進・抑制効果の検討：被害者への同情と裁判に対する規範的なイメージに着目して、*感情心理学研究*、査読有、22 巻 3 号、2014、110-117

<http://doi.org/10.4092/jsre.22.110>

〔学会発表〕(計 57 件)

太田 紘史、実験哲学への誤解反論に潜む誤解：フランクファート型事例の場合、*応用哲学会*、2018

Ayaka Sugiura, Yukihito Yomogida, Kazuki Iijima, Toshikazu Hasegawa, and Kenji Matsumoto、Performance decrement induced by increasing social incentive, *Society for Social Neuroscience*、2016

Keiichiro Yamamoto, Koji Tachibana、Eisuke Nakazawa, Yoshiyuki Takimoto, Ethics of decoded neurofeedback in clinical research, treatment, and moral enhancement、*International Electromaterials Science*、2016

川 昭利、平山 いずみ、亀田 達也、自己の行動選択を他者が推定することの認識に関する脳内基盤、*実験社会科学カンファレンス*、2015

鈴木 貴之、自由意志と責任に関する実験哲学研究とその意義、*日本科学哲学会*、2015

唐沢 かわり、心の知覚と道徳的判断について、*日本科学哲学会*、2015

信原 幸弘、サイコパスと道徳 / 慣習の区別、*科学基礎論学会*、2014

〔図書〕(計 12 件)

信原 幸弘、*勁草書房*、情動の哲学入門、2017、272

太田 紘史、信原 幸弘、立花 幸司ほか、*春秋社*、*モラル・サイコロジ*：心と行動から探る倫理学、2016、441(太田 219-269、信原 271-315、立花 373-411)

信原 幸弘ほか、*講談社*、現代日本の四つの危機：哲学からの挑戦、2015、343(43-65)

亀田 達也ほか、*勁草書房*、「社会の決まり」はどのように決まるか、2015、197(175-192)

松元 健二ほか、*誠信書房*、本当のかしこさとは何か：感情知性(E I)を育む心理学、2015、200(116-133)

亀田 達也ほか、*岩波書店*、社会のなかの共存、2014、248(97-120)

太田 紘史ほか、*勁草書房*、シリーズ新・

心の哲学 認知篇、2014、275 (1-28、
111-164)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

信原 幸弘 (NOBUHARA, Yukihiro)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号 : 10180770

(2)研究分担者

亀田 達也 (KAMEDA, Tatsuya)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号 : 20214554

鈴木 貴之 (SUZUKI, Takayuki)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号 : 20434607

立花 幸司 (TACHIBANA, Koji)
熊本大学・大学院人文社会科学研究部・准
教授
研究者番号 : 30707336

唐沢 かおり (KARASAWA, Kaori)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号 : 50249348

松元 健二 (MATSUMOTO, Kenji)
玉川大学・付置研究所・教授
研究者番号 : 50300900

太田 紘史 (OTA, Koji)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号 : 80726802

(3)連携研究者

樫 則章 (KATAGI, Noriaki)
大阪歯科大学・歯学部・教授
研究者番号 : 40194766